

2020

地域インターンシッププログラム活動報告書



Local Internship Program (LIP)

地域が抱える課題を住民とともに発見し、

その解決方法を考える

和歌山大学観光学部

はしがき

和歌山大学観光学部における「地域インターンシッププログラム（LIP）」の取り組みは、2008年度に開始されて以降、これまでに145件のプログラムが実施され、延べ1600人以上の学生が地域での様々な活動を通じた実践的な学びの機会を得ています。現地を訪れ、地域の方々とともに課題に取り組むなど密度の濃い交流を続けた結果、なかには数年にわたる継続的なプログラムに発展する活動もみられるようになりました。学生の受け入れやプログラムの実施にご尽力いただいている地方自治体や関係諸団体の皆様のご支援とご協力に心から感謝を申し上げます。

さて本学部は、「観光経営」「地域再生」「観光文化」の3つの基本領域を軸として、これらの領域を融合的かつ横断的に学ぶカリキュラムに取り組んでいます。本カリキュラムにおいては、高度な専門性を発揮できるようになること、そして、現場での創造的実践力を獲得することを目標に、国際性を高める教育と国内外の地域の諸課題に取り組む実践型教育を重視しています。地域を訪ね現場で起きている事柄を身をもって学ぶことができるLIPは、観光学部の実践型教育の一翼を担う取り組みとして、もはや欠かすことのできない位置を占めています。今後は、これまでの成果と経験を活かしつつ、地域課題に則したプログラムを実施できるよう日々改善を図り、さらに質の高い地域連携活動へと発展させていく所存です。

今年度は新型コロナウイルスが世界的に猛威を振るう中で、LIPにおいてオンラインでの活動を中心とせざるを得ない状況となりました。8月には「観光学部地域インターンシッププログラム（LIP）における学外研修活動および対面での活動に関するガイドライン」を策定し、地域内外の感染状況を見極め、十分な対策を講じた上で、可能な範囲での学外研修活動も実施いたしました。こうした取り組みにご理解・ご協力いただいた行政、受け入れ団体をはじめとする地域の関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

今後とも、本学部では引き続き地域連携活動に取り組んで参ります。LIPの活動に一層のご支援ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2021年3月

和歌山大学観光学部

地域連携委員会 永瀬節治

目次

はしがき	1
目次.....	3
1. LIP の概要とこれまでの歩み	4
1) LIP の概要	4
2) データから見る LIP の歩み	5
2. 2020 年度 LIP 活動報告	8
1) 和歌山県岩出市.....	10
2) 和歌山県紀の川市.....	12
3) 和歌山県海南市.....	14
4) 和歌山県海草郡紀美野町	16
5) 和歌山県海草郡紀美野町	18
6) 和歌山県有田市.....	20
7) 和歌山県有田市.....	22
8) 和歌山県有田郡広川町	24
9) 和歌山県日高郡美浜町	26
10) 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町	28
11) 和歌山県新宮市.....	30
12) 和歌山県全域.....	32
13) 大阪府阪南市.....	34
14) 和歌山県有田郡有田川町.....	36
15) 山口県岩国市および愛媛県新居浜市	38
16) 岩手県胆江地方および和歌山県	40
参考資料.....	42
1) LIP の沿革	42
2) これまでの LIP 活動地域と活動テーマ一覧	44

1. LIP の概要とこれまでの歩み

1) LIP の概要

和歌山大学観光学部では、和歌山県内及び大阪南部の市町村などの協力のもと、地域が抱える課題を地域住民とともに発見し、その解決方法を考える「地域インターンシッププログラム」（通称：LIP¹）を実施している。本プログラムは、地域活性化に関心をもつ学生が、現地に足を運び、地域住民と連携することによって地域の課題や調査活動に取り組むもので、「学生と地域を活性化したい」、「地域の魅力を発見したい」といった地域からの提案を受け、毎年複数の活動を実施している。

LIP に参加する学生は、学内の事前学習や現地視察を通して地域の実情を学び、さらには現地調査や地域住民との交流、イベントの企画運営などを通じて、それぞれの地域の真の魅力や課題と向き合っていく。具体的なプログラムとしては、観光施設の職員や利用者への聞き取り、宿泊施設や農家民泊のモニター、集客イベントの企画運営、観光資源調査やマップ作成、就業体験などに取り組んできた。

「この地域にはどのような観光資源があるか」、「埋れている観光資源はないか」、「観光資源が有効に活用されているか」、「どうすれば地域が元気になるか」。こうした課題に対して、地域住民は生活者の視点から、学生は「ヨソ者」の視点から意見を出し合い、ともに活動をしていく。このような対話や活動が、双方にとって新たな気づきの機会となることもこのプログラムの特徴である。

LIP は、こうした相互作用を通じて、地域住民は「ヨソ者」の力を活かしながらより自立的なまちづくり活動を行う力を、そして学生は地域住民の思いを理解しつつ、地域活性化の方法を提案できる力を養い、地域を支える人材として活躍することを目指している。

上記の趣旨を踏まえ、本プログラムは、学生が、「地域の方々と交流を図りながら、観光振興や地域再生の実践を現場で学ぶ」ことができる内容を含むことを実施の要件としている。

なお、LIP には、和歌山県内及び大阪南部の市町村など、地域から学生が地域再生や観光振興の現場を体験できるプログラムを公募するタイプ（公募タイプ）と、観光学部の専任教員が、地方公共団体などとの共同研究などを通じた連携のもとにプログラムを申請するタイプ（申請タイプ）の2タイプがある。

また、LIP は 2012 年度より単位として認定されている²。地域での活動が授業として開講され、単位化されたことは、学生にとっても地域活性化への関心をより広げる契機となっており、学生の参加意欲向上にも寄与している。

¹ 2011 年に RIP (Regional Internship Program) から LIP (Local Internship Program) に改称。

² 単位取得のためには事前事後学習を含めて 30 時間以上の活動が求められる。活動時間に応じて、「基礎自主演習」または「プロジェクト自主演習」の単位が認定される。

2) データでみる LIP の歩み

観光学部で実施している LIP は 2020 年度で開始 13 年目を迎えた。ここでは、これまでの LIP の歩みについて、データをもとに示してしていく。

表 1 は、2008 年度以降の年度別実施プログラム数を示している。年度ごとのプログラム数にはばらつきがあり、最多 21 件（2016 年度）、最少 3 件（2010 年度）となっている。2011 年度からは、観光学部専任教員からの申請により実施される申請タイプが創設され、プログラム数が安定するとともに幅広い活動が可能となっている。

表 1 年度別プログラム数

2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	合計
6	8	3	4(1)	11(5)	5(2)	10(3)	15(6)	21(7)	19(4)	13(3)	14(4)	16(3)	145

※カッコ内は申請タイプのプログラム内数

次に、図 1 は年度別の参加学生数を示している。参加学生延べ人数は、2014 年に 100 名、2016 年には 200 名を超えるなど、増加している。これは、実施プログラム数が増加したとともに、プログラムあたりの定員規模の拡大が起因していると考えられる。ただし、全プログラムが一様に拡大傾向を示しているわけではなく、現状では、大規模のものと小規模のものが並存する状態にある（2020 年度は最少 4 名、最大 35 名）。この点は、プログラムの内容など、地域の課題やニーズに即したかたちで活動が実施されていることが影響している。

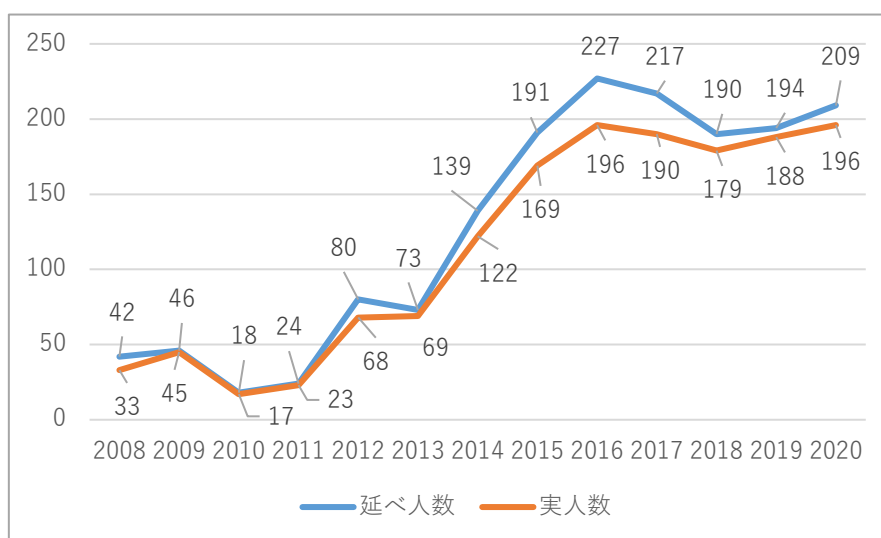


図 1 年度別参加学生数

表2に示した通り、学年別の参加学生数は1回生がもっとも多い。低学年次から地域での活動に関心を持ち、積極的に地域と関わりたいと考える学生が増加していることを示している。このような傾向は近年みられるようになったもので、図2のように、プログラム創設初期は2、3回生の参加が中心であった。

また、4回生の参加者がみられるようになったことも近年の特徴である。これは、単年度のプログラムではなく、同様の地域において継続的に実施するプログラムが増加していることが要因であると推察される。

表2 学年別参加学生数

	1回生	2回生	3回生	4回生
延べ人数	1650	608	556	359
実人数	1495	577	499	118

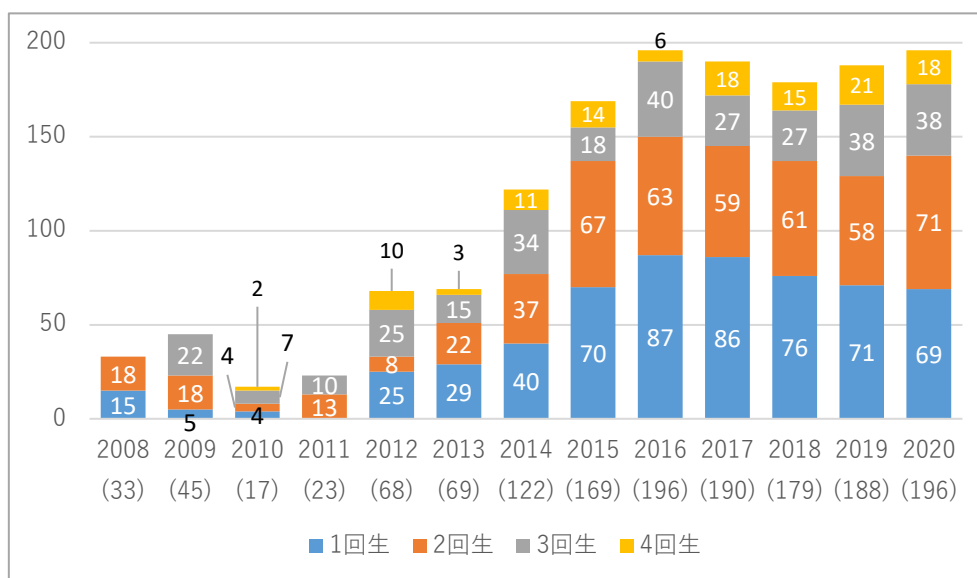


図2 学年別参加学生数の変遷 (実人数ベース)

次頁図3に示すのは、プログラムあたりの平均参加学生数である。先に述べた定員規模の拡大によりプログラムあたりの平均参加学生数が増加傾向であったが、近年は小規模のプログラムが実施されていることもあり、徐々に減少傾向にあった。2018年度からは、定員規模の大きいプログラムが複数みられたことで、プログラムあたりの平均参加学生数が13～14人前後で推移している。

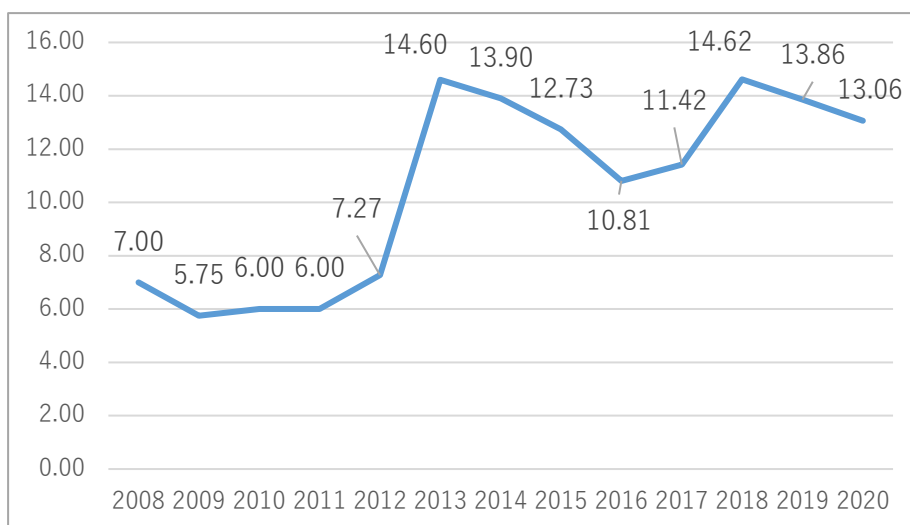


図3 プログラムあたりの平均参加学生数（延べ人数ベース）

また、図4に示すように、プログラム数および定員規模が拡大したことにより6期生以降、参加者数は飛躍的に増加している。特に13、14期生は来年度以降も新たに学生が参加する可能性があるため、この傾向はより顕著になると予測される。

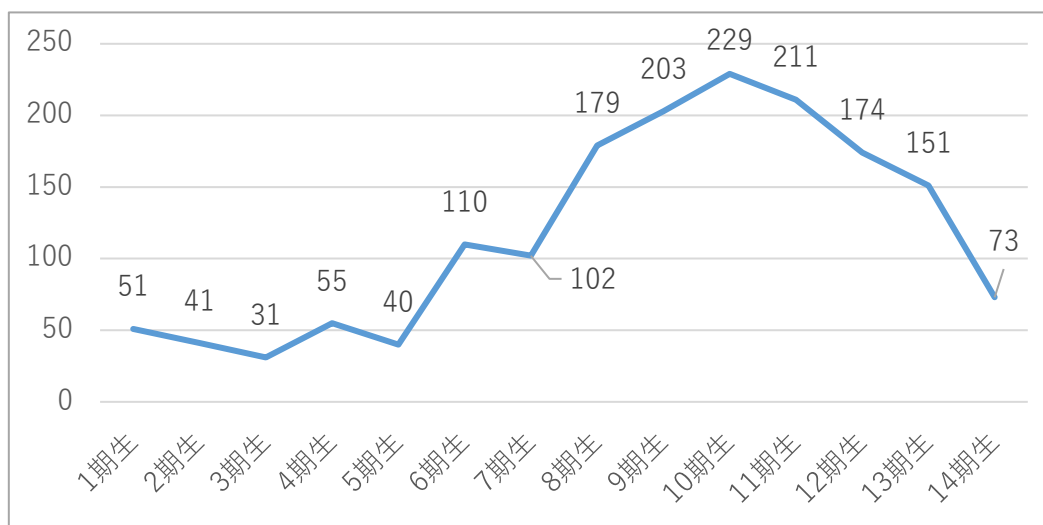


図4 期生ごとの参加者数の推移

以上のように、開始から13年が経過した本プログラムは、参加学生数ならびにプログラム数が安定していることから、参加学生および地域からのニーズを汲み取った活動が展開されているとみることができる。しかしながら、今後も継続的に本プログラムを実施するにあたっては、それぞれの取り組みの質の向上と学生自身が学びをより深めることができるプログラムを提供することが求められている。

（文責：観光実践教育サポートオフィス 藤井 至）

2. 2020 年度 LIP 活動報告

2020 年度は、16 プログラムが実施され、延べ 209 名の学生が地域で活動を行った。以下に示すのが今年度の実施プログラムの一覧である。

No	地域名	テーマ	参加 学生数
1	岩出市	道の駅「ねごろ歴史の丘」利用者調査及び利用促進企画	7
2	紀の川市	紀の川スイーツの開発	16
3	海南市	交流・関係人口増を目指したエリア体験型観光コンテンツ開発	4
4	紀美野町	地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生	15
5	紀美野町	きみのげんきマップの作成	6
6	有田市	箕島で暮らす多世代の住民による魅力再発見	8
7	有田市	青みかん（摘果みかん）の価値を上げる	12
8	広川町	ツギー谷のお花畑の活用を通じた津木地域の活性化を考える	18
9	美浜町	アメリカ村の観光コンテンツの発掘及び情報発信	7
10	那智勝浦町	地域の文化や風習の体験を通じて、地域住民と触れ合い、地域・自分・社会のより良いあり方・つながり方を考える。（興味関心に応じて）地域をフィールドにそれぞれの知見を深め、価値を創出していく。	8
11	新宮市	新宮市高田区における観光モデルコースの造成	12
12	和歌山県全域	「紀の国わかやま文化祭 2021」学生による文化の魅力発信	5
13	大阪府阪南市	古代米を活用した商品開発、PR に関して。「古代米をおいしく食べる」	6
14	*有田川町	学生との協働による継続的な棚田保全活動	35
15	*山口県岩国市および愛媛県新居浜市	瀬戸内カレッジ 2020	19
16	*岩手県胆江地方および和歌山県	農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証	31

※* は申請タイプのプログラム



和歌山県岩出市

道の駅「ねごろ歴史の丘」利用者調査及び利用促進企画



【地域の基礎データ】

人口：54,031人（令和3年1月末現在）

高齢化率：22.9%（令和2年1月1日現在）

産業：製造業、農業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：7名（1回生：5名、2回生：2名）

活動期間：平成30年5月～

担当教員：永井隼人

1. 活動実施の経緯

和歌山県岩出市は根来寺や和歌山県植物公園緑花センターなどを有し、また近年では道の駅ねごろ歴史の丘を中心に観光振興に力を入れている。しかし、観光客の市内での滞在時間が短いこと等が課題となっている。岩出市 LIP では 2019 年度から岩出市産業振興課、ねごろ歴史の丘管理協会と連携し、岩出市の抱える課題に取り組んでいる。2019 年度は道の駅での利用者調査、スタンプラリーの開発を行った。2020 年度は道の駅での調査を継続しながら、道の駅の更なる知名度の向上、利用者の増加を目指し活動を行うこととなった。

2. 活動の内容

新型コロナウイルス感染症拡大のため、2020 年度前半は主に道の駅に関する文献調査、事例研究を行い、その後インスタグラムのハッシュタグを用いた分析を実施した。ハッシュタグ「#道の駅ねごろ歴史の丘」が含まれるインスタグラムの投稿計 130 件の分析を実施し、道の駅利用者の特徴の分析を試みた。2020 年 11 月 28 日及び 29 日には、道の駅にて利用者調査を実施した。感染防止のため、対面での調査は避け、駐車場にてナンバープレート調査を実施した。調査結果は LIP 関係者との会議の際に報告し、調査から明らかになった課題や今後の活動について意見交換を実施した。

3. 活動を通じて

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、現地での活動機会が少なくなってしまったが、文献調査やオンラインでの活動など、来年度の活動に向けて様々なデータの収集・蓄積をすることが出来た。またこのような状況下においても、参加学生は地域の方々と連携しながら地域の課題を学ぶという貴重な経験を得ることが出来た。

4. 成果物（ポスター）

和歌山大学 観光学部
2020年度

岩出市 LIP

Local Internship Program



道の駅 ねごろ歴史の丘

～ 道の駅「ねごろ歴史の丘」利用者調査及び利用促進企画 ～

- **道の駅「ねごろ歴史の丘」**
和歌山県の北の玄関口に位置し、平成29年12月24日にグランドオープンした道の駅である。岩出市にある史跡根来寺を紹介し、現在と最盛期の根来寺を対比的に見せるガイド施設「ねごろ歴史資料館」や県内の観光情報を提供する情報提供コーナー、県内のお土産物を取り揃えた物販施設、飲食施設などがあり、新たな観光拠点としての役割を担っている。
- **活動目的**
道の駅の利用者数と利用者がどの地域から多く来ているかを把握する。
しかし、コロナ禍で…
昨年度はインタビューも行ったが、人と接触する調査は控えることになった。そのため、人と接触せずにデータを集める調査を行うことにした。
- **2020年度 活動内容**
 - **インスタグラムのタグ調査**
(集計期間2017年11月19日～2020年8月21日の130件の投稿を調査)
 - ・バイカーによるバイク関連の投稿が多かった。
 - ・道の駅巡りの一つで道の駅「ねごろ歴史の丘」を訪れて投稿する人が多い。
 - ・食べ物や周辺施設のタグもいくつか見られた。
 - ・インスタグラムに道の駅の投稿をする人は年齢層高め。
 このインスタグラムの調査結果を使って現地調査を行う。
 - **ナンバープレート調査 (11月28日・29日)**
 - ・和歌山ナンバーはもちろん和泉やなごといった大阪のナンバーが多い。
 - ・近畿ナンバーが多く見られる中、札幌、秋田といった遠方のナンバーもあった。
 - ・インターチェンジが岩出市の近くにあるのに対し、奈良からの車両が少ない。
 - ・バイクの投稿が多かった割にバイクの数は特別多いとは思わなかった。(しかしバイクミーティングをするバイクの集団が来たときもあった)
- **見えてきた課題と提案**

課題

 - ・インスタグラムの調査で道の駅の投稿をする人の年齢層が高め。
 - ・より多くの観光客や地元の人に道の駅を利用してもらう必要がある。

提案

 - ・若い世代にインスタグラムで投稿してもらうために、おしゃれな写真スポットを作る。
 - ・道の駅の公式LINEを作り、情報を発信する。



道の駅 ねごろ歴史の丘



No. 1

#同時使用タグ分析



#同時使用タグ分析

バイク スタンプ 和歌山



No. 14

形式、トピック、ねごろ歴史の丘との関連度ごとに分類

投稿ID	形式	トピック	ねごろ歴史の丘との関連度
20171119_001	写真	道の駅	高
20171119_002	写真	バイク	中
20171119_003	写真	和歌山	低
20171119_004	写真	道の駅	高
20171119_005	写真	バイク	中
20171119_006	写真	和歌山	低
20171119_007	写真	道の駅	高
20171119_008	写真	バイク	中
20171119_009	写真	和歌山	低
20171119_010	写真	道の駅	高
20171119_011	写真	バイク	中
20171119_012	写真	和歌山	低
20171119_013	写真	道の駅	高
20171119_014	写真	バイク	中
20171119_015	写真	和歌山	低




→この結果を、来年度の活動にも活かしていきます！

和歌山県紀の川市

紀の川スイーツの開発



【地域の基礎データ】

人口：61,094人（令和2年12月末現在）

高齢化率：32.2%（令和2年1月1日現在）

産業：農業（桃・柿・キウイ・いちじく） など

【活動の基本情報】

参加学生数：16名（1回生：5名、2回生：3名、3回生：8名）

活動期間：平成30年5月～

担当教員：竹田明弘

1. 活動実施の経緯

紀の川市は、県内屈指のフルーツ王国である。近年、これらの実績をふまえ、紀の川フルーツツーリズムというプロジェクトを立ち上げ、フルーツ王国として知名度を県内外に高めるための活動を行っている。これら紀の川市の一連の活動を考慮し、本活動ではフルーツを使用したスイーツを開発することで、紀の川市に貢献することを目的として実施された。

2. 活動の内容

本活動は、参加希望した観光学部学生、紀の川市役所、協力店舗の3者の協力のもとで実施したスイーツ開発活動である。本年は、株式会社 藤桃庵、Café sweets Sablier、和歌山電鐵株式会社(たまカフェ)と共同でスイーツの開発を実施した。また、株式会社 藤桃庵との活動については、そこで開発した商品を一般販売することを念頭においていたため、大学生活協同組合とも活動を共にした。活動の成果として、株式会社 藤桃庵については「キルシュ香るホワイトチョコとバニラ苺」として商品化され、和歌山大学生協だけでなく、各地で販売された。また、Café sweets Sablier については「ハロウィーンランチ限定デザート」して10月末から11月初旬にかけて店舗販売された。たまカフェについては、4月発売にむけて活動中である。

3. 活動を通じて

本年は、COVID19 感染拡大による対面活動の制限という特殊な年度であった。ミーティングは主にオンラインミーティングで実施された。当初、このような形態での活動に不慣れなこともあったが、学生の順応性は高く、比較的早期に円滑なミーティング運営ができるようになった。たまカフェなど現在も継続中の活動もあるが、少しでも地域に貢献できるようなスイーツを開発していきたい

4. 成果物（ポスター）



紀の川 LIP

-2020 年度活動報告-



紀の川 LIP は、和歌山県紀の川市のカフェとコラボレーションし、スイーツ開発を行っています。今年度はコロナウイルスの影響もあり、戸惑う場面も多くありましたが、3つのプロジェクトをさせていただくことができました。私たちの活動は、紀の川市の皆様や企業様に支えられ、来年度には大きなプロジェクトに参加させていただきたく思います。これからも感謝を忘れず、観光学部を代表する LIP として進化していきます。

～活動内容～

- スイーツ開発
- 統計学を勉強
- スイーツに関する調査 etc.



和歌山大学観光学部
アイス はじめました

紀の川市 LIP 事務局

1. アイス開発

藤桃庵さんのジェラートとコラボさせていただきました。高級感にこだわり、お酒の風味と苺の甘酸っぱさを感じる商品になりました。大変好評いただき、来年度は新たなプロジェクトとしてスタートします。



2. ハロウィンスイーツ開発

サブリエさんにご協力いただきました。季節感を重視したデザートプレートを目指し、ハロウィンらしさを見た目でも感じていただける仕上がりになりました。



3. たまカフェスイーツ開発

たま駅長で人気の貴志駅たまカフェさんにご協力いただいている進行中のプロジェクトです。コロナ禍で様々な問題があるなか、新商品の開発を進めています。発売されましたら、ぜひいちご電車に乗って、貴志駅を訪れてみてください。

目指すところ

紀の川市の皆様に、カフェが
無いの場、コミュニティ形成
の場となり、私たちが開発した
スイーツがそのきっかけと
なるよう思いをこめて活動し
ています。

-Kinokawa LIP-

和歌山県海南市

交流・関係人口増を目指したエリア体験型観光コンテンツ開発



【地域の基礎データ】

人口：49,508人（令和2年12月末現在）

高齢化率：36.1%（令和2年1月1日現在）

産業：製造業、家庭日用品産業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：4名（1回生：3名、2回生：1名）

活動期間：令和2年6月～

担当教員：藤田武弘

1. 活動実施の経緯

下津町大崎地区に「げんき大崎館・かざまち」が設置（H27年）されて以来、毎週土曜日の「朝市（新鮮な地元農水産物と地元原料に拘った手作りのお惣菜等を販売）」や各種体験交流イベントの開催など、地域内経済の循環をはじめ地区内外の住民にとって貴重な交流の場を提供してきた。しかし、著しい高齢化の進行により、交流人口・関係人口を増やすことが急務であるとの認識から、大学生など「よそ者・若者」の目線から地域の資源を再発見することの必要を痛感し、LIP参加学生と協働でのプロジェクトの立ち上げを企画した。

2. 活動の内容

コロナ禍で学生の対面型での活動が大きく制約を受ける中、現地の受入事務局を担当する「地域おこし協力隊員」とのオンラインでのミーティングを積み重ね、コロナ収束後の域学連携活動の再開に向けた「基礎調査」として、①観光学部学生を対象とした大崎地区の取り組みに対する認知度アンケート調査（Web）、②朝市等の訪問客を対象とする地域資源の魅力に対するアンケート調査（留め置き回収方式）の実施に向けた活動に取り組んでいる。

3. 活動を通じて

当初から複数年度での活動が提案されていたことから、今年度のみで成果を上げて完結させようといった焦りを持つことなく、多少の制約があったとしても、オンラインとはいえ次年度以降に繋がるような現地受入事務局との密度の濃い意見交換が行われたことの意義は大きい。参加者が1・2年生を中心とするメンバーで構成されていた初めてのプログラムではあったが、逆にパイオニア精神が発揮され、参加学生たちは極めて熱心に活動した。次年度以降の活動に大いに期待がもたれる。

4. 成果物（ポスター）

海南市LIP

荻野 愛① 上村 加奈②
長谷川 珠希① 武子 遼音①
担当教員: 藤田武弘教授

【基本情報】

～海南市～
海南市は和歌山県の北西部沿岸に位置する人口約5万人の市です。

～活動状況～
私たちは海南市の中でも北西にある大崎地区を主な活動地としています。今年
は感染拡大防止のため現地へ行くことはほとんどできませんでしたが、山と海に
囲まれた自然豊かな地域です。奥まった港や山道を抜けた先にある小さな街並
みは思わず写真に収めたくなるほど魅力的です。

～活動メンバー～
2年生1人、1年生3人の計4人で活動しています。

↑ オンライン上での
ミーティング活動中

【活動目的】

- 海南市大崎地区の交流・関係人口増を目指したエリア体験型観光コンテンツの開発
- 地域の資源を活用した新たなコンテンツを作るために、海南市大崎地区のことを知る
- 大崎地区が、他地域の人からどのように思われているのかを調査し、コロナ後に円滑にコンテンツ開発に進めていけるようにする

【活動内容】

6月 活動開始 → 9月 現地訪問 → 10月 オンラインミーティング → 11月 アンケート作成

現地の様子

地域おこし協力隊
隊員の方にも
ご協力いただきました。

【学び・気づき】

今年度の活動では、コロナウイルスの影響もあり、現地調査を一度しか行うことができませんでしたが、地域おこし協力隊隊員の方の協力のもと訪れたげんき大崎では、美しい海と地域の方の暖かさに触れることげでき、魅力発信と向上に努めたいという思いが強くなりました。

その後、地域の方も含めオンラインミーティングを進める中で、若者の認知度を高めたり、魅力を発信していく必要があるという現状を知りました。

そのため、現在はアンケート実施に向けて話し合いをし、アンケート実施後は内容を生かした観光コンテつづくりを行いたいと考えています。

また活動を通して、地域の方目線と、学生目線で物事を考えられるようになったことが、私たちの成長であり、今後も活動を通してさらに学びを深めてゆければと考えています。

和歌山県海草郡紀美野町

地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生



【地域の基礎データ】

人口：8,640人（令和2年3月末現在）

高齢化率：46.2%（令和2年1月1日現在）

産業：棕櫚製品製造業、農業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：15名（1回生：5名、2回生：6名、3回生：4名）

活動期間：平成30年4月～

担当教員：佐野楓

1. 活動実施の経緯

2017年度まで5年間に渡り、紀美野町の上神野地区で発動してきたこのLIPは、一昨年頃から地域を新たに紀美野町の小川地区で活動を進めてきた。本LIPは新しいメンバーを加えて、2020年6月に小川の郷づくり会さんと顔合わせをした後に、本格的に活動をスタートした。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、小川地区の方々と参加学生の健康と安全へ配慮し、オンライン活動を中心となり、現地でのフィールドワークを自粛した。

2. 活動の内容

本LIPは2020年6月からほぼ毎週の木曜日にオンライン会議（活動）を行ってきた。今年度の主な活動は3つがあった。すなわち、①新型コロナウイルス感染予防のため、新たな観光形態—バーチャル観光のあり方と小川地区での実施に関する探索；②紀美野町における観光公害を解決するための意見交換；③12月13日に開催された世界民族祭のために、これまでの小川LIP活動紹介の動画作成であった。

3. 活動を通じて

課外活動が実施できない中、参加学生はオンライン会議を通じて、小川LIPに関する様々なことを積極的に取り組んできた。勉学面だけでなく、メンバー間の親睦を深めることができた。



4. 成果物（ポスター）

きみの

紀美野町小川LIP

地区×学生による観光・文化・
交流情報発信と棚田の再生

紀美野町

和歌山県北西角、ススキの大草原が広がる生石高原。その麓に広がる紀美野町小川地区は、豊かな自然に恵まれています。人、地域文化、自然とのつながり多様なイベントや地域交流活動の形で大切に残されておられる風景一つ一つが訪れた人々の心を癒します。毎年行われる冬まつり、夜空で輝く星々と、冷たい冬の夜を灯す竹灯籠やイルミネーションは格別です。また、山笠祭をはじめ、生石登山、古民家「風の森」宿泊などの体験を通して、私たちに小川地区の人々の温かさを感じさせてくれる、そんな地域です。

新型コロナウイルス感染症の発生により、2020年度の冬まつりや山笠祭は中止となりました。写真は前年度のものです。

ここが私のアナザースカイ。

各SNSにて発信中！

Twitter

Instagram

Facebook

活動目的

学生視点での、生石高原を中心とした小川地区の観光誘客・PR、活性化策の提案、小川地区の魅力を発信し、「最高の魅力」を発見することも目指しています。

2020年度活動内容

- ・毎週会議
- ・Zoomで紀美野町の方々と交流
- ・世界民族祭への参加
- ・棚田の再生プロジェクト
- ・SNSでの活動

顔合わせ

新型コロナウイルスの影響で現地に行くことが困難であったため、小川地区のみなさんとオンラインで顔合わせをしました。小川地区の現状について教えてもらい、今後の主な活動内容である棚田の再生について協議しました。

小川の暮づくり会の方々とオンライン会議をしている様子。久しぶりの顔合わせでテンションMAXの生石生かき町の学生の一団！！

世界民族祭

紀美野町で毎年開催されている世界民族祭に向けて動画を制作しました。2020年の世界民族祭はオンラインで開催され、小川LIPの活動内容、参加学生の学びや思いを動画にまとめました。

中田の棚田

現在紀美野町小川地区では生石高原の北斜面に広がる約10平方メートルの棚田を地域おこしの目玉にすることを目的とした「中田の棚田再生・活用プロジェクト」が行われています。高野山へ多くの米を納めていたという古い歴史も残る中田の棚田ですが、現在では大半が放棄され雑木や雑草が生い茂っています。私たち小川LIPは中田の棚田が以前のような美しい原風景を取り戻し小川地区の地域資源として地域の発展へとつなぐ棚田再生プロジェクトの活動に今後積極的に参加をしていきたいと考えています。

和歌山県海草郡紀美野町

きみのげんきマップの作成



【地域の基礎データ】

人口：8,640人（令和2年3月末現在）

高齢化率：46.2%（令和2年1月1日現在）

産業：棕櫚製品製造業、農業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：6名（1回生：5名、2回生：1名）

活動期間：平成27年4月～

担当教員：藤井至

1. 活動実施の経緯

紀美野町では、平成27年度より、世代間交流の推進を目的にコミュニティカフェ（きみの*にこcafe）を立ち上げ、当初よりLIP活動として企画・運営を担ってきた。しかしながら、これまでのLIPにおける活動拠点は旧野上町の数か所に限定されており、今後どう他地域へ展開させていくかが課題となっていた。そこで、令和2年度からは、活動地域を紀美野町全域に拡大し、地域住民に地域の強み・魅力を再度認識してもらい、地域ならではの情報を整理し共有するツールとして、「きみのげんきマップ」の作成を目的とする活動を行うこととなった。

2. 活動の内容

新型コロナウイルス感染症の影響により、限定的ではあったが以下の活動を行った。

- ・受入担当者との顔合わせ・意見交換：紀美野町の現状や課題に関する意見交換など
- ・マップ作成に向けた学内会議：活動実施に向けた準備、アンケート調査の検討など
- ・マップ作成に関する住民意向調査：マップ作成や日頃のつながりに関する調査を実施
- ・住民意向調査報告書の作成・報告会：作成した報告書を基に報告会を実施予定（3月）

3. 活動を通じて

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、本来予定をしていた地域活動団体に対するヒアリング調査等が実施できない中で、オンラインを活用した取り組みを実施してきた。参加学生たちは、一度も現地を訪問することが叶わなかった（日程を組んだが大阪府に医療非常事態宣言が発出されたことにより中止）が、事前提示資料や保健福祉課とのオンラインミーティング、自主学習を活用し、アンケート実施まで活動を展開した。次年度以降の取り組みについては、分析したアンケートを活用し、地域住民にとって利用価値のあるマップの作成に取り組んでいくことを望む。

4. 成果物（ポスター）

紀美野町

きみのげんきマップLIP

テーマ:きみのげんきマップの作成

2020年度メンバー
2回生:栗川 翔多 1回生:安藤 夢乃, 石関 萌乃, 岩本 彩花, 増本 有花, 南岡 友美

8月
紀美野町保健福祉課の方々とオンラインミーティング（顔合わせ）

9月
今後の活動方針について意見交換
フィールドワークの活動方針決定

10月
マップの情報掲載についての議論、原案の検討
マップのイメージ図収集

11月
アンケート作成開始
地域の方々に向けての自己紹介用紙の作成
フィールドワークへ行く際の確認事項&アンケート目的を明確にする

12月
アンケートの作成
紀美野町保健福祉課の方々とオンラインミーティング
*新型コロナウイルス感染拡大によりフィールドワーク中止
→保健福祉課の方々にアンケートを配布してもらう方針に変更

1月
アンケートの提出&印刷&配布
アンケート回収後の活動方針について意見交換

2月
アンケートの回収&入力&分析
アンケートの表、グラフ作成

~地域サロンの様子~
いきいき百歳体操

***次年度からマップ作成に取り組みます**



（昨年度の活動写真を使用しています）

和歌山県有田市

箕島で暮らす多世代の住民による魅力再発見



【地域の基礎データ】

人 口：27,197 人（令和 3 年 2 月 1 日現在）

高齢化率：33.8%（令和 2 年 1 月 1 日現在）

産 業：農業（みかん）、漁業（太刀魚）、工業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：8 名（1 回生：5 名、2 回生：2 名、3 回生：1 名）

活 動 期 間：平成 29 年 6 月～

担 当 教 員：藤井至

1. 活動実施の経緯

有田市箕島地区では、「箕島地区の魅力をお子たちに伝える」をテーマに二年、同地域における多世代交流をさらに進める活動として地域活動団体「ワンハート（箕島地区における活動団体）」と連携した活動を一年の三年間活動を実施してきた。令和 2 年度についても引き続き、ワンハートとの連携を軸に、地域のお子たちから大人まで多世代交流を盛んにするようなイベント企画・運営を活動目的とした。また、活動の中では、これまで実施されてこなかった各種活動におけるアンケート調査の実施やその効果測定、報告書の作成・発信等も視野に入れた活動計画を設計した。

2. 活動の内容

新型コロナウイルス感染症の影響により、限定的ではあったがオンラインを活用し、以下の活動を行った。昨年度に引き続き、イベントへの参加ではなく、その過程を重視した。

- ・有田市社会福祉協議会へのヒアリング：有田市・箕島地区の現状を知る
- ・ワンハート会議（オンライン）への参加：ワンハートへの企画提案など
- ・オンライン音楽会の企画・運営：全 4 回のオンラインイベントを企画・運営
- ・オンライン異世代活動報告会への参加：司会動画および活動報告動画の作成・公開
- ・その他の活動：上記の活動に関連したオンライン会議を多数実施

3. 活動を通じて

活動が制限されている中でも多世代間交流の場を作るべく積極的な活動が展開できた。参加学生・地域住民にとって慣れないオンラインイベントであったが、参加者の評価も高く、地域住民からは抵抗感のあったオンラインツールの活用についても前向きになれたという意見も聞かれた。イベントの企画・運営については、これまでの取り組みによりノウハウが蓄積されてきたが、それらのイベントの地域に対する効果については必ずしも確認できていない。効果検証については、今後の課題として取り組んでもらいたい。

4. 成果物（ポスター）

2020年度 箕島 LIP 活動報告

活動テーマ… 箕島の多世代交流

箕島ってどこ？

箕島は有田市にあり、人口は約3万人。有田のみでなく、有田市域や大分県、さらすなごも特産品！私たちは毎年夏まで「箕島LIP」を日本縦断してLIPです。

有田

老若

男女

オンライン音楽会

参加者それぞれが合唱している動画を集めて1つの動画を作成し、鑑賞する「オンライン音楽会」を企画しました。参加者交流会と、完成した動画を視聴する鑑賞会を行いました（いずれも ZOOM 使用）。

第1回

第2回

皆で歌うのがこんなに良いと思いませんでした。 —参加者

第3回

第4回

はじめてのオンラインイベント。不安だったが来てくれた人に喜んでもらえてよかった。 —LIP 学生（1回生）

動画をみてあつたかい気持ちになった。コロナの中でもつながることができることの証明ができたと思う。

—社協さん（地域）

ワンハートへの参画

毎月の定例会議に参加することで、地域で活動する団体と接点を持っている。ワンハートが主体となって活動する企画「折り鶴作成」と「モザイクアート作成」を提案した。現在、展示実施に向けて準備中。

普段の活動

毎週オンライン会議を実施。地域側の窓口である有田市社会福祉協議会様との会議も定期的を実施。箕島訪問も少人数で実施することができ、地域の雰囲気をつかむことができた。

反省と来年度に向けて

幅広い世代と交流を深められた一方…

- ・メンバー間のコミュニケーション不足によって情報共有がうまくいかなかった。
- ・企画が終了後に参加者との連絡手段がなくなるため、参加者とLIPとの継続した関わりが生まれにくい。

次年度の改善策

- ・正式な会議ではない場面での話は会議で話をして議事録に残す。質問があればすぐに聞いて解決する。
- ・メールまたはSNSアカウントを作成し、企画に参加していただいた人に情報発信をする

和歌山県有田市

青みかん（摘果みかん）の価値を上げる



【地域の基礎データ】

人 口：27,197 人（令和 3 年 2 月 1 日現在）

高齢化率：33.8%（令和 2 年 1 月 1 日現在）

産 業：農業（みかん）、漁業（太刀魚）、工業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：12 名（1 回生：6 名、2 回生：6 名）

活 動 期 間：令和 2 年 6 月～

担 当 教 員：藤井至

1. 活動実施の経緯

有田市では地域住民や一般企業などと協働して有田みかんの更なるブランド化や販路開拓支援、ふるさと納税を活用した PR など、みかん産業支援を積極的に実施している。そこで、これまで実施してきた取り組みを踏まえた新たなチャレンジとして、毎年みかん収穫前にみかんの大きさを揃えるために成りすぎた果実を減らす作業（摘果作業）によって捨てられている「青みかん（摘果みかん）」の価値向上に取り組むことを LIP の活動目的とした。また、令和 2 年 3 月に有田市宮原町の旧駐在所をリノベーションして誕生した地域交流拠点「宮原さん家(ち)」を活動拠点とし、その活用についても検討することとなった。

2. 活動の内容

新型コロナウイルス感染症の影響により、限定的ではあったがオンラインを活用し、以下の活動を行った。また、顔合わせ・事前学習会以降は、地域の課題・学生のニーズを受け、商品開発班・レシピ作成班・イベント企画班の三班に分かれて活動を展開した（その後、活動広報の必要性から広報班も設置）。

- ・顔合わせおよび事前学習会：宮原地区・みかん産業・青みかんを学ぶ
- ・班ごとの会議および企画プレゼン会：学生の事前学習による企画プレゼンと意見交換
- ・フィールドワーク：プレゼン会での意見を受けてヒアリング調査を実施
- ・最終プレゼン会（報告会）：今年度の活動を総括し、次年度の活動を提案

3. 活動を通じて

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、本来予定していた活動が出来なかった中で、オンラインを活用し可能な限りの活動が展開された。今年度は、主に準備期間という位置づけとしたため、次年度以降、状況にもよるが具体的な取り組みが展開されることを期待している。

4. 成果物（ポスター）



宮原青みかんLIP

宮原青みかんLIPとは？

宮原青みかんLIPは今年から新しく始まった活動です。全国に高いブランド力を誇る「有田みかん」ですが、収穫の前に大きさを揃えるために「青みかん」と呼ばれる段階で実が捨てられてしまいます。その「青みかん」の価値を上げるという目的を掲げ、宮原青みかんLIPは作られました。青みかんを使用したレシピ・商品の開発をするとともに、令和2年3月に有田市宮原町の旧駐在所をリノベーションして誕生した地域交流拠点「宮原さん家」を拠点としたイベントの企画を地域の方とともに進めています。

レシピ班

レシピ班では、摘果みかんで「美味しく、おしゃれ」なレシピを考案しています。レシピを考案するにおいて、難しい点は普段、私たちが日常で食べているみかんとは異なり、摘果みかんは苦味と酸味が強いという点です。しかし、この点は利点にもなります。レシピ班は、摘果みかんの特徴を活かしたレシピをこれからもどんどん考案していきます。11月に行ったヒアリング調査では、摘果みかんを利用したレシピに対して、宮原地区の住民に意見をいただきました。この意見をもとにこれからもレシピ開発を進めます！



商品開発班

商品開発班は、食品系・美容系・雑貨系・生活用品系の4つの面から取り組んでいます。今年度の星には摘果みかんを使用したポン酢・フルーツソース・リップクリーム、乾燥させた摘果みかんを使用したレジン・入浴剤を試作しました。また、早稲田地区に訪問した際には、商品開発に携わる大浦さんに商品開発のコツなどをお聞きし、試作段階の商品の試食・試飲もさせていただきました。今後は、それらを参考に試作の改善を行っていきます。



イベント企画班

イベント企画班では、宮原さん家を活用したイベントを考案しています。新型コロナウイルスが流行する中、いつ開催されるかわからないイベントを企画することに苦労しましたが、「地域の方が大切にしてくれたもの」に重点を置き、ターゲットやイベント開催の目的を絞ってきました。実際に現地を訪ねた際に伺った宮原町の方の地元への想い、そしてこれから先どのような街になってほしいかと言う考えに沿ったイベントを実際に開催したいと思います。



広報班

広報班は、地域の方々に「青みかんの価値を上げる」という活動を知ってもらうために発足した班です。Instagramを始めとしたSNSにより、自分たちのLIPの活動内容や青みかんについて知ってもらうことを目標としています。また、自分や自分たちで作成したチラシなどで、考案したイベントや商品、料理を発信していく予定です。今後は、LIPのシンボルを考えたのち、どんどん投稿していきます。見かけた際には読んでいただくと幸いです。

今後の課題

今年度から活動が始まり、今年は特に青みかんや宮原地区への理解を深めることに重点を当てて活動をしました。地域の方から青みかんについて説明を受けたり、実際に現地を訪問して宮原地区の雰囲気を知ったりすることで、商品やイベントのイメージを作っていくことができました。来年度は、今年度作った商品・レシピ・イベントの案を実際に試作し、改善していく段階に入っていきます。地域の方と意見を活発に交換し合いながら、より良い案を出していきたいと考えています。

和歌山県有田郡広川町

ツギー谷のお花畑の活用を通じた津木地域の活性化を考える



【地域の基礎データ】

人口：6,837人（令和3年1月末現在）

高齢化率：33.6%（令和2年1月1日現在）

産業：農林業、漁業、製造業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：18名（1回生：6名、2回生：4名、3回生：4名、4回生：4名）

活動期間：平成26年6月～

担当教員：永瀬節治

1. 活動実施の経緯

本LIPでは、広川町津木地区の活性化に取り組む津木地区寄合会（以下、寄合会）の活動を平成26年度より支援している。これまでに、寄合会の活動拠点である「ツギー谷のお花畑」（以下、お花畑）におけるイベントの企画運営や、地域内外の出店イベントでの加工品の販売、「稲むらの火」の舞台である広地区での活動等を寄合会と連携し実践してきた。

2. 活動の内容

お花畑は平成30年の台風被害と老朽化により閉鎖状態が続いていたが、昨年度に県の補助金を得て、寄合会メンバーによりお花畑の再整備が開始された。学生も順次作業に加わる予定であったが、その矢先にコロナ禍に見舞われた。一方、今年度からは1・2回生合わせて8名の新メンバーが加わった。8月まではオンラインによる地域情報や事例の共有等を行い、9月から11月までは毎月1回、感染症対策を講じながら可能なメンバーで現地を訪れ、お花畑の整備作業等に取り組んだ。並行して、今後のお花畑の活用アイデアの検討をオンラインで行った。年明けの緊急事態宣言の発出により、以後はオンラインでの活動を続けた。

3. 活動を通じて

今年度はコロナ禍の影響により現地での活動時間が限られたものの、お花畑の整備作業への参加を通じて、地域での活動の展開イメージが明確になった。1月下旬に行った寄合会・役場担当者とのオンライン会議では、お花畑の活用策に関する提案と、今年度の活動の振り返り、今後の活動について意見交換を行った。学生の提案内容についても前向きに受け止めていただくことができ、来年度は具体的な活用アイデアを実践する予定である。

4. 成果物（ポスター）



和歌山大学観光学部

広川町 Local Internship Program

— ツーギー谷のお花畑の活用を通じた津木地域の活性化を考える —

広川LIPの活動について

私たち広川町LIPは、広川町津木地区の「魅力発見」と「魅力発信」を目的に活動しています。津木地区者委員会の方々を連携して2014年から活動を行っています。今年で7年目になる広川町LIPは、今年度は1年生6名、2年生4名、3年生4名で活動に取り組みました。活動内容として、例年までは広川町で行われていた行事への参加や、広川町や津木地区の特産品調査でしたが、今年度は津木地区にあるお花畑の活用を通じた地域の活性化を目的に活動しました。これらの学外での活動以外に、広川町への理解を深めるLIPの活動をより良いものにするため学内で総会議を行っています。

2020年度活動報告

現地訪問

今年度は、津木地区にあるツーギー谷のお花畑の活用を通じた地域の活性化を目的として活動しました。お花畑を作成するにあたって、津木地区の理解を深めることやツーギー谷の現状を把握することを目的とした現地訪問を行いました。1回目の訪問では津木地区の観光やツーギー谷の見学を行い、地域への理解を深めることができました。また、1回目の訪問により分かったツーギー谷の現状から、新しいお花畑を作成するためには整備が必要であると考え、2回目と3回目の訪問では津木地区者委員会の方々や協力してツーギー谷の整備を行いました。具体的には、ツーギー谷の中で今後お花畑を作成する区画を決め、その区画に花を植えられるように草取りを行いました。今後もツーギー谷の整備を続け、お花畑の作成を計画予定で



Where is Hirogawa town?

Wakayama university

Hirogawa

広川町は和歌山県中部に位置し、海・山・川という自然に恵まれた地域です。観光客は、春は桜、初夏にはホテルの美しい光景を鑑み訪れます。沿道の地域は、津波被災に関する「揺むらの火」や瀬口稲穂ゆかりの地として知られており、近年は「日本遺産」に指定され、注目を集めています。

2020年度 スケジュール

6/30	新メンバー集合合わせ
8/26	他感語合わせ会
9/7	オンライン交流会
9/24	現地訪問①
10/25	現地訪問②
11/26	現地訪問③
1/29	メンバー合わせ会

総会議

広川町LIPは、毎月火曜日にオンライン上で30分間の総会議を行いました。前期の総会議では、まず広川町やお花畑について知ることを目的としました。各グループに分かれて調べ学習を行い、広川町や津木地区の概要、お花畑の事例などのプレゼンテーションをお互いに行いました。それらを踏まえ、自分達ができることを考え意見交換を行いました。後期では、広川町LIPに与えられた区域の活用例を考え、ツーギー谷のお花畑をどう活用すべきかを再度グループに分かれて話し合いました。子供をターゲットにしたお花畑、体験型のお花畑、情報などのテーマに沿ったお花畑などの案をまとめ、プレゼンテーションを実施しました。地域の方々の意見や現地活動で得た情報を踏まえ、より細かい提案を行うことができました。

オンライン会議

今年の広川町LIPでは、現地の方々や2回にわたり、オンラインでの会議を行いました。今年は前年度と内容が変わり、ツーギー谷のお花畑を活用するというで現地の方々や進め方についての話し合いが行われました。オンラインでの会議では、私たちが考えたお花畑のイメージを伝えるとともに、それに対して現地の方が意見をいただくという機会が設けられました。私たちの話し合いだけでは出てこなかった花畑に対する貴重な意見を聞く、いい機会となりました。今後、いただいた意見をもとに来年度の活動に向けて話し合う予定です。今回オンライン会議を通して感じたことは、やはり、私たちと現地の方との距離が生まれてしまうということです。私は対面で会議をして、同じ空間の中で意見を交換し合う雰囲気が大変だなと感じました。今年の状況でのLIPの活動はやりづらい面もありましたが、その自分たちのベースで活動を進められたのではないかと思います。



左：ツーギー谷の見学/右：お花畑の草取り



Instagram : @hirogawa lip #inamura.fire

和歌山県日高郡美浜町

アメリカ村の観光コンテンツの発掘及び情報発信



【地域の基礎データ】

人 口：6,923 人（令和 3 年 2 月 1 日現在）

高齢化率：36.0%（令和 2 年 1 月 1 日現在）

産 業：漁業、農業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：7 名（1 回生：4 名、2 回生：1 名、3 回生：2 名）

活 動 期 間：令和 2 年 6 月～

担 当 教 員：東悦子

1. 活動実施の経緯

2019 年度の LIP 美浜町では、三尾（通称アメリカ村）のカナダミュージアムの機能強化を中心に活動を行った。2020 年度は、前年度の参加学生のうち 1 名が継続して参加し、新たに加わった学生とアメリカ村の観光コンテンツの発掘及び情報発信のテーマで活動を行うこととなった。

2. 活動の内容

美浜町の観光コンテンツの発掘を目的として、学生は各々に美浜町に関して調べ、オンラインによる定例ミーティングで情報共有と意見交換を行った。10月になり、ようやく美浜町訪問が実現し、美浜町役場の職員の方々やカナダミュージアム館長と意見交換の場を持った。また、アメリカ村の数か所を見て回り、カナダ移民の歴史にまつわるスポットや海や山の美しい景色を肌で感じる機会を持った。この学外研修の経験から、いくつかのコンテンツをまとめてモデルプランを提案することになり、スタディツアーとサイクリングツーリズムのグループに分かれて話し合いをすすめた。12月および1月に、美浜町役場の方々とオンライン・ミーティングを実施し、2つのプランを発表し、意見交換を行った。その際の助言を受けて、さらに内容を検討し改訂を進めた。その後、最終のプランをまとめるとともに、報告会のポスターや映像制作に取り組んだ。

3. 活動を通じて

対面でミーティングを実施できない困難さがある中、参加学生達はオンラインでミーティングを重ね、協力して観光コンテンツのアイデアをまとめた。会を重ねるごとに学生達は主体性を持って活動を進め、次年度につながるプランとなった。今後、それらのプランを美浜町で実地検証できることを期待している。最後に、本活動を支えてくださった美浜町役場の田中敦之氏、片山拓弥氏、カナダミュージアム館長の三尾たかえ氏に感謝申し上げます。

4. 成果物（ポスター） ※等倍無視で圧縮しています。等倍圧縮をお願いします。

美浜町LIP

美浜町HPより

1. 美浜町の紹介

和歌山県は、多くの海外への移民を送り出しました。
その中でも和歌山県日高郡美浜町三尾地区は、通称『アメリカ村』と呼ばれ、カナダへ多くの移民を送り出した地域です。



カナダミュージアム

2. 活動目的

“観光コンテンツの発信”

三尾地区の観光資源を
大学生の視点から発見

観光コンテンツを活かした
モデルツアーの作成

3. 活動内容

○会議
週に1度、Teamsでの会議を実施
二つの班に分かれて作業

○フィールドワーク（10/18）
美浜町の三尾地区・カナダミュージアムの視察

サイクリングツーリズム

サイクリングツアーを企画

コース1
御坊駅～美浜町
美しい景色を楽しみつつ
自転車移動
↓
そのまま美浜町の散策

コース2
御坊駅～美浜町
バス移動
↓
自転車を借りて美浜町を探検

スタディツアー

カナダミュージアムの活用
・カナダ移民についての勉強

美浜町の自然を活かす観光コンテンツ作り
例) SUP体験、



カナダミュージアムの庭

4. 今後の展望

今回作成したツアーをもとに、三尾地区の魅力を発信していく。
新型コロナウイルス感染症の影響を受け、現地調査があまりできなかったため、現地での調査を重ね、ツアーの内容の強化をしていきたい。

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

地域の文化や風習の体験を通じて、地域住民と触れ合い、地域・自分・社会のより良いあり方・つながり方を考える。(興味関心に応じて)地域をフィールドにそれぞれの知見を深め、価値を創出していく。



【地域の基礎データ】

人 口：14,595 人（令和 3 年 1 月末現在）

高齢化率：42.1%（令和 2 年 1 月 1 日現在）

産 業：林業、水産業、観光業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：8 名（1 回生：1 名、2 回生：3 名、3 回生：3 名、4 回生：1 名）

活 動 期 間：平成 28 年 6 月～

担 当 教 員：八島雄士、岸上光克

1. 活動実施の経緯

本 LIP は、色川ならではの行事や風習への参加を通し、学生の知見を深めることを中心に活動を行ってきました。また、活動を通して「学生が感じたこと」を地域住民に発表する場を設けることで、住民のいわゆる「鏡効果」醸成にも寄与してきました。

2. 活動の内容

色川地区は、1970 年代頃から移住者を受け入れてきた地域として有名ですが、主に訪問する小阪区は、比較的移住者は少なく、昔からの地域行事や風習が残っているところが特徴です。棚田や茶畑が地域資源として知られています。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で現地を訪れる困難さのなかで、感染症対策をして棚田作業体験（藁撒き作業）を 1 度だけ実施できました。また、オンラインを活用する取り組みとして、現地発行誌「色川だより」のアーカイブ化、オンラインによる住民との意見交換会などを実施しました。

3. 活動を通じて

色川での暮らしや住民の皆さんの色川への想いについて知ることができました(1 回生)。棚田作業の経験から農業の大変さをより深く学ぶことができました(2 回生)。コロナ禍にあって、住民と学生のマッチングが上手くいかないこともありました。しかし、オンラインでの LIP 活動も可能であることに気が付くことができました。遠隔地である点を考えて、今後もオンラインを活用した活動を工夫していきたい(リーダー：3 回生・森田 光)。

4. 成果物（ポスター）

和歌山大学観光学部地域インターンシッププログラム（LIP）2020

那智勝浦町色川地区





地域の文化や風習の体験を通じて、地域住民と触れ合い、地域・自分・社会のより良いあり方・つながり方を考える（興味関心に応じて）地域をフィールドに、それぞれの知見を深め、価値を創出していく

色川地区について

那智勝浦町色川地区は、那智勝浦町の中心部から山間部へ車で30分ほど走った所に位置する、9つの区から成る、人口が300人ほどの小さな地域です。かつて盛況していた鉱業が1970年代に廃止となり、地域の人口は外部へと流出していききました。しかし、同時期より外部からの移住者を積極的に受け入れ、現在では地区全体の人口のおよそ半分を移住者が占めるまでになりました。ただ、LIPの活動を主に行っている小阪区は、他区と比べ移住者は少なく、その代わりに昔からの地域の行事や風習が比較的残っている地域となっています。地域資源としては、美しい棚田や茶畑が有名であります。特に「小阪の棚田」は、一度休耕田となった棚田を移住者を含む地域住民が主体となり再興させ、現在も関係人口の方々などを交えた保全活動が定期的に開催されています。



色川地区でのLIPについて

2016年度から活動を行ってきた那智勝浦町色川地区におけるLIPは、色川ならではの行事や風習への参加（フィールドスタディ）を通し、学生の知見を深めることを中心に活動を行ってきました。また、活動を通して学生と住民が関わることにより、住民のいわゆる「鎮効果」醸成にも寄与してきました。2020年度は、これまでの活動をベースにしつつ、棚田などにまつわる地域の課題解決に向けた具体的なアクションを起こすことで、地域の課題を「自分ごと」にする取り組みも予定していました。

2020年度活動報告

2020年度の活動は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初の計画通りの活動を出来ませんでした。しかし、現地を訪れなくても出来る活動を考え、実行することで、学生の学びを深めました。また、1度のみではありましたが、感染対策を万全に実施した上で、LIP参加学生全員が現地を訪れる機会も設定し、棚田の保全作業などを体験しました。

参加学生の声

- LIPの活動全体を通して、色川での暮らしや住民の皆さんの色川への想いについて知ることが出来ました。
- 棚田での作業の経験は、滅多にすることのできない経験であったため、貴重な経験をさせて頂き、また農業の大変さをより深く学ぶことが出来ました。

「色川だより」アーカイブ化

大学で出来る活動として、「色川だより」のアーカイブ化を行いました。本誌は、1992年から現在に至るまで定期的に発行されており、色川の時事トピックや、移住者の自己紹介などの記事が掲載されています。アーカイブ化により、色川についての理解を深める文献を、いつでも確認できるようになりました。



棚田作業体験

フィールドスタディとして、棚田に草を撒く作業を体験しました。住民とコミュニケーションを取りつつ、短い時間ではありましたが、地域資源の保全についての理解を深めました。



住民との意見交換会

色川地区の住民と交流する場として、意見交換会をオンラインにて実施しました。当日は、主にコロナ禍における色川地区の現況について、住民と意見を交わしました。中山間地域におけるリアルな現況について学びきっかけとなりました。



今後の展開

本LIPでは、学生が地域に入り、住民個人が実際に抱えている具体的課題に対しその解決に向けての活動を行うことが主でありました。しかし、住民と学生のマッチングが上手くいかない場合も多々あったため、今後は、地域の課題として一般化している部分を抽出し、そこでの活動を行っていく予定です。また、今年度はオンラインでのLIPの活動も可能であることに気が付くことができた1年でありました。色川地区は遠隔地であるため、コロナ禍が終息した晩にも、現地での活動を軸としつつ、補完的にオンラインを活用した活動も行っていきたいと考えております。

和歌山県新宮市

新宮市高田区における観光モデルコースの造成



【地域の基礎データ】

人 口：27,796 人（令和 3 年 2 月 1 日現在）

高齢化率：36.9%（令和 2 年 1 月 1 日現在）

産 業：製材業、製紙業、漁業、林業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：12 名（1 回生：4 名、2 回生：6 名、3 回生：2 名）

活動期間：令和 2 年 6 月～

担当教員：伊藤央二

1. 活動実施の経緯

新宮市は和歌山県南東部に位置し、熊野三山の一つ「熊野速玉大社」が鎮座するまちとして栄えてきた。高田区は新宮市中心部より西側に位置し、かつては高田村として発展してきた地域である。この高田区について、地域の魅力ある観光資源が存在しているにも関わらず、若年層を中心に十分な誘客ができていない状況にあり、これらの地域における誘客は新宮市の観光において重要となる。そこで、地元の活力を取り戻すための活動を行っていく高田区（委員会）と連携し、実際に現地での交流や地域の観光資源の体験を通して、様々な観光事情や魅力を知ってもらうこと、それについて広く発信できる力を身につけてもらうことを目的とし、学生主体での新鮮な観光モデルコースの造成を行うこととした。

2. 活動の内容

新宮市役所企画政策部商工観光課の担当者と Teams を使い、ミーティングやプレゼンテーションを実施した。本来であれば、夏休み期間中に現地研修を行い、観光モデルコースを開発する予定であったが、新型コロナウイルス感染症により、現地研修は中止となり、全ての活動をオンラインで行うことになった。現地研修は中止となったが、高田中学校の生徒および教員とのオンライン交流会を実施し、高田地区の情報収集をするとともに、地域の方々と交流することができた。

3. 活動を通じて

新型コロナウイルス感染症の影響により、予定通りの活動はできなかったが、オンラインを用いて新宮市職員および高田区の方々と交流できたことは非常に有意義であった。

4. 成果物（ポスター）

和歌山大学 × 新宮市

2020年度 新宮市高田区LIP

～地域振興活動に向けた関係づくり～

活動メンバー：1回生4名、2回生6名、3回生2名

【新宮市高田区の概要・現状】

新宮市とは和歌山県南部・紀南地方にある市の一つ。世界遺産にも登録されている「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産の一つである「熊野速玉大社」をはじめとして、数々の歴史的名所を擁する市です。

高田区は新宮市の山間にある集落であり、こちらも温泉施設や「日本の滝百選」に選定された滝など魅力的な観光資源を有しています。しかし、（特に家族連れ層や若年層について）十分な誘客ができていない状況となっています。新宮市の定めている観光コースにおいても、高田区が入っているものは存在しません。

【新宮市LIPの発足と当初の目標】

現状の問題点を是正するため、新宮市からのアクションにより和歌山大学との連携が決定しました。目的は、大学生が観光振興活動に参加することで、若年層に向けての有効な誘客活動につなげること。更に、地域住民と大学生が活発に交流する過程で、お互いに地域と観光についての認識を高めあうことも副次的な効果として期待されていました。当初の具体的な目標としては「新しい新宮市観光モデルコースの造成」を掲げ、2020年度よりLIPとしての活動が発足しました。

↓ しかし、コロナ禍の影響を受け… ↓

【活動方針・形式の変更】

上記のような活動方針を掲げて発足した新宮LIPでしたが、新型コロナウイルスの蔓延状況に収束の兆候が見えなかったことから大幅な活動縮小を余儀なくされます。当初は現地での研修をふまえた観光モデルコースを作成する予定となっていました。コロナ禍によるリスクが大きいため現地での活動は困難となりました。オンラインで可能な活動についてLIPメンバーと市役所職員の方で各々検討を重ねた結果、今年度は高田区にある中学校の生徒との交流会をオンラインで開催し、次年度以降の本格的な活動に向けた「関係づくり」を重視して活動を行うことになりました。

【新宮市LIP×高田中学校 オンライン交流会】

新宮市立高田中学校とのオンライン交流会を2021年1月に行いました。当日は大学生と中学生がお互いに自己紹介した上で、大学生は大学生生活や観光学部について、中学生は高田区や自分たちの事についてプレゼンテーションを行いました。質疑応答・フリートークの時間には、「バスの料金が高本数も少ない」など、現地住民目線での問題点を知ることができました。双方が見識を深めることのできる貴重な体験となりました。



↑ 当日の高田中学校生徒の様子
高田中学校は生徒7名、教員6名の小さな学校でした。



↑ 交流会モニター画面の様子
当日はZoomを用い、中学校側が2台のPCを接続して交流しました。

【新宮市LIP 参加学生の声】

・コロナウイルスの影響から新しい活動案を模索したが、その案の多くを実現できなかったことは反省点と考える。一方で、オンラインとはいえ高田中学校の方々との直接の交流ができたことは非常に良かった。次年度からはもっと自発的、また積極的に課題解決に向けて取り組みたい。(1回生 向井)

・オンライン会議をあまり多く開かず、また特異な状況下であることから現地活動も行わなかったことは残念。交流会も遂行に改善の余地はあるものの、自分の中学校生活との違いを感じることができてとても新鮮だった。高田中学校の方々とうちのために新宮や高田に話りたいと思った。(1回生 伊藤)

・高田区は大自然が残っていて素晴らしい地区であることを理解した。熊野川や山々の風景は素晴らしいのだがまだまだ観光化されておらず、これらをもっと観光化するかが当地の今後の課題であると考え、次年度は更に多くの地元住民とも交流し意見交換をしたい。(2回生 重本)

和歌山県全域

「紀の国わかやま文化祭2021」学生による文化の魅力発信



【地域の基礎データ】

人 口：912,364 人（令和3年1月1日現在）

高齢化率：32.4%（令和2年1月1日現在）

産 業：農林業、漁業、製造業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：5名（1回生：2名、2回生：3名）

活 動 期 間：令和2年6月～

担 当 教 員：加藤久美

1. 活動実施の経緯

和歌山県では、第36回国民文化祭・わかやま2021と第21回全国障害者芸術・文化祭わかやま大会（「紀の国わかやま文化祭2021」）が令和3年10月30日から11月21日までの23日開催される。全国的な規模による発表、競演、そして障害のある人もない人も共に参加し、交流の輪を広げる国内最大の文化の祭典として県では初めて開催される。県内外から多くの参加が見込まれ、全国に和歌山県の文化を発信し、県民の文化力を向上させる機会となる。本事業は、学生が文化の魅力を発信することにより、本文化祭の認知度の向上と開催機運の醸成を図ることを目的とする。今年度の活動は、文化体験など取材を通して感じられた魅力を文化祭公式 SNS を活用して、県内外に向けて発信すること、そのための取材計画をたて、実際に取材、内容をまとめ、次年度の文化祭での活動計画に役立てることとした。

2. 活動の内容

年度はじめの緊急事態宣言や課外活動自粛により、10月には文化祭のキャンペーン部隊であるキャラバン隊への取材は一度行うことができたものの、予定した取材の実行、情報発信までは行うことができなかった。

- 1) 今年度の目標設定・活動計画
- 2) 取材企画書の作成
- 3) 取材対象団体の選択（箏と尺八、生花、ジャンベ、和太鼓、漆器）
- 4) 取材日程作成、団体との交渉

3. 活動を通じて

コロナの影響で取材などの現地での活動はできなかったが、今後のための話し合いはしっかりできた。取材を通し、様々な文化を軸にして和歌山を盛り上げようとしている方々の思いや取り組みを知り、たくさんの方々に届くように PR していきたいと感じた。

4. 成果物（ポスター）

紀の国わかやま文化祭LIP

長谷川夏芽 吉永友依南 谷口紗彩 喜納怜香 橋本芽衣

紀の国わかやま文化祭とは？

和歌山県で開催される文化芸術活動の発表・競演・交流などを行う国内最大の文化の祭典。

* 開催期間：令和3年10月30日(土)～
11月21(日)まで



活動目的

地域との交流・連携を深め、文化体験や取材を行い、紀の国わかやま文化祭に係る文化の魅力を発信する。

活動内容

- ・ 出前体験プロジェクトメニューから取材する団体を選択
- ・ 取材計画書、日程表の作成
- ・ 文化祭のPRイベントへの参加
- ・ 広報キャラバン隊の方へのインタビュー



今年度の反省と来年度の目標

今年度は、コロナの影響により現地での活動がほとんどできなかったが、取材の準備のための話し合いなど今後に向けた取り組みはしっかりできた。来年度は、今年度の取り組みを活かして取材を行い、様々な文化を軸にしながら和歌山を盛り上げようとしている方々の思いや取り組みを知り、その魅力がたくさんの人に届くようにPRしていきたい。

大阪府阪南市

古代米を活用した商品開発、PR に関して。「古代米をおいしく食べる」



【地域の基礎データ】

人 口：53,014 人（令和 3 年 1 月末現在）

高齢化率：28.7%（平成 27 年 1 月 1 日現在）

産 業：紡績業、漁業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：6 名（1 回生：2 名、2 回生：4 名）

活 動 期 間：令和 2 年 6 月～

担 当 教 員：佐々木壮太郎

1. 活動実施の経緯

2018 年度から引き続きの活動である。過去 2 回は阪南市商工会で最終報告会を実施していることもあり、今年度は阪南市商工会が主体となって実施する「はんなん古代米プロジェクト」の活動に加わることとなった。

2. 活動の内容

「はんなん古代米プロジェクト」は、阪南市で古代米を栽培し、古代米を利用した商品を市内企業が展開することによって、それらを地場産品として位置づけ、ブランド力の強化と地域全体の活性化を目指す取り組みである。LIP の当初の計画では、商品提案・パッケージデザイン提案から商品化へ至る全体への関わりを期待されていた。コロナ禍の影響で学生の現地での活動・交流が制限される中で、テレビ会議への参加など、活動内容として大幅に縮小される形を取らざるをえなかった。実際の活動の提案内容としては、日本酒のパッケージ考案とクッキーのパッケージ記載の英語フレーズの考案を行なっている。このうち、クッキーのパッケージについては、コミュニケーションツールとなることを目標に 6 パターンが選ばれ、現在、企業側で作業が進行している。



3. 活動を通じて

コロナ禍の最中であり、現地活動の制約もあって、参加学生の意欲にもばらつきが生じる結果となった。とはいえ、一定の活動成果を残すこともでき、このことは学生にとっても貴重な経験になったと思われる。ぜひ今後の大学生活に活かして欲しいと考える。

4. 成果物（ポスター）

阪南市LIP

令和2年度



活動内容

阪南商工会とナカイ製菓の皆様で阪南市の
古代米を使った商品開発のお手伝い



古代米プロジェクト

阪南市の地場産品として成長できるよう行われて
いるプロジェクト。
今回、栽培した古代米はベニロマンという品種。



学生が主に行ったこと

- ①日本酒のパッケージ考案
- ②クッキーの袋に記載される英語のフレーズの考案

①の例

- ・黒くシックな印象に
- ・透明の容器でロゼ色をアピール
- ・米粒型の容器で原料の古代米を強調

②の例

1	Have a nice day!
2	Choose happiness.
3	Have a better day!
4	May you be happy and fruitful
5	Dreams come true
6	Thank you always
7	I'm happy to see you
8	Everyday is new day.
9	Tomorrow is another day!

和歌山県有田郡有田川町

学生との協働による継続的な棚田保全活動



【地域の基礎データ】

人口：26,082人（令和3年1月末現在）

高齢化率：31.8%（令和2年1月1日現在）

産業：農業（みかん、山椒、花き）、林業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：35名（1回生：5名、2回生：11名、3回生：10名、4回生：9名）

活動期間：平成23年7月～

担当教員：大浦由美

1. 活動実施の経緯

有田川町での第19回全国棚田（千枚田）サミット（2013年度）開催決定をきっかけに、2010年に県が企画した「棚田モニターツアー」に当時の観光学部生約20名が参加した。地域の農業者の高齢化とともに耕作放棄地が増加する当地の現状を目の当たりにして、学生側から「棚田保全ボランティア」のアイデアが出されたことをきっかけに、学内で棚田保全ボランティアへの参加者を募り、「棚田ふぁむ」を結成。2011年7月から活動を開始した。



2. 活動の内容

今年度はコロナ禍の影響を受け、現地活動は「稲刈り」と「草刈り・獣害柵見回り」の2回となった。その他の活動は以下の通りである。

- ・ 現地とのオンライン交流会：6月と2月に開催し、親交を深めた。
- ・ 活動報告誌の作成：現地活動の報告の代わりに、新メンバーの紹介や自宅待機中の学生生活の紹介などを行った。
- ・ 沼地区の紹介パンフレットの作成：沼地区からの依頼により、地区の概要や農産品を紹介するためのパンフレットを作成した。

3. 活動を通じて

今年で活動10年目の節目の年であったが、コロナ禍により現地活動の縮小を余儀なくされた。しかし、オンラインミーティングを併用し、互いに「顔の見える関係」を維持することを心がけた。また、県庁・有田川庁役場・沼の農業を守る会と連携し、本活動に即したCOVID19対策マニュアルやチェックリストを作成し、共有した。今後、コロナ禍がしばらく続くとしても、できる限りの対策を講じた上で活動を継続させていきたい。

4. 成果物（ポスター）



棚田ふあむ

棚田ふあむの結成

全国棚田サミット開催に向けて、和歌山県が平成22年に開催した棚田モニターツアーに参加、耕作放棄地が増加する棚田の現状を目の当たりにする。和歌山県と有田川町からの棚田保全活動の提案によって学内で参加者を募り、棚田ふあむ結成。

平成23年度から有田川町沼地区で活動を開始。現在まで10年間活動。当初は棚田の保全を目的に活動していたが、現在は棚田と棚田を保全する地域の人を支える活動をしている。



有田川町沼地区

和歌山県中央部に位置し、「日本の棚田百選」に選定された「あらぎ島」をはじめとして、多くの棚田が点在しています。急傾斜地の棚田が美しく、近年では「ぶどう山根」の栽培も盛んです。ただ、高齢化が進み、沼地区の人口割合はほとんどは高齢の方が占めています。そのため、棚田やぶどう山根もいまはその方たちが栽培可能でも、後継問題や自分たちで栽培ができるかという問題が深刻です。



活動内容



オンライン活動
7月



稲刈り・草刈り
9月



獣害柵点検・芋掘り
12月



オンライン交流会
1月

コロナウイルスの流行により、新メンバーを加えての活動はオンラインでした。週に1度の定期ミーティングなどの活動もオンラインで行いました。今までにない活動形態で初めは戸惑いが多かったです。

今年度初めての対面活動ができました。活動の際にはマスクの着用やソーシャルディスタンス、アルコール消毒など感染防止を徹底し取り組むことができました。マスクをせずに活動していたときの日常がとても幸せだったのだと感じました。

今年度2度目で最後の対面活動でした。コロナ対策バッチリの上で1回生が楽しく芋掘りを体験していました！始にはコロナは関係ないので獣害柵の見回りもしっかり行いました！

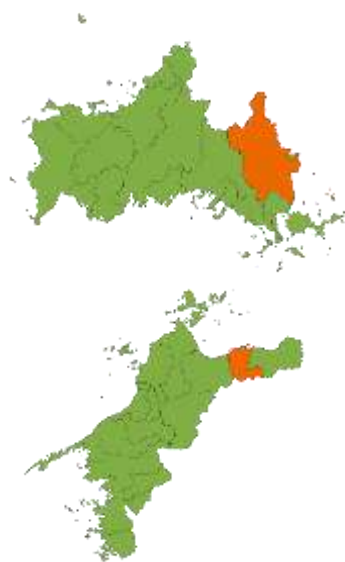
今年はオンラインで交流会と幹部交代をしました。学生、地元の方、県庁の方、OB・OGの方々に参加して頂き、約40人集まりました。OB・OGの方々にはビデオメッセージなどを頂き話が盛り上がりしました。

今年度の総評

- ・ 稲刈りは初めての体験でした。慣れてくるとさくさく刈り取ることができて楽しかったです。
- ・ 獣害は地域にとって深刻な課題であるということがわかりました。
- ・ 稲刈りの作業だけでなく、地域の方々とお話して交流することも大切だと思いました。
- ・ 交流することで、学生も勉強になり、地元の方々もやりがいや誇りを感じられると思いました。

山口県岩国市および愛媛県新居浜市

瀬戸内カレッジ 2020



【地域の基礎データ】

人 口：	132,052 人（岩国市／令和 2 年 2 月 1 日現在）
	117,846 人（新居浜市／令和 2 年 12 月末現在）
高齢化率：	33.5%（岩国市／平成 27 年 1 月 1 日現在）
	30.8%（新居浜市／平成 27 年 1 月 1 日現在）
産 業：	製造業 など（岩国市）
	製造業 など（新居浜市）

【活動の基本情報】

参加学生数：	19 名（1 回生：8 名、2 回生：11 名名）
活動期間：	令和 2 年 7 月～
担当教員：	木川剛志

1. 活動実施の経緯

JR 西日本と瀬戸内地域の自治体が主催する「瀬戸内カレッジ」に参加しました。各地域の課題を踏まえて、「せとうちエリアが何度も訪れたいくなる場所になること」に繋がるプランを考えて、発表します。担当した市町村は、山口県岩国市と愛媛県新居浜市です。

2. 活動の内容

和歌山大学が担当した市町村は、山口県岩国市と愛媛県新居浜市です。二つの班に分かれて、岩国班は 9 月 16～17 日、新居浜班は 9 月 28～29 日に現地実習を行いました。そして他大学と合同でオンラインで 10 月 11 日キックオフミーティング、11 月 14 日に中間発表会、1 月 15 日に最終発表会を行いました。新居浜班は「旅行会社・自治体特別賞」を受賞することができました。

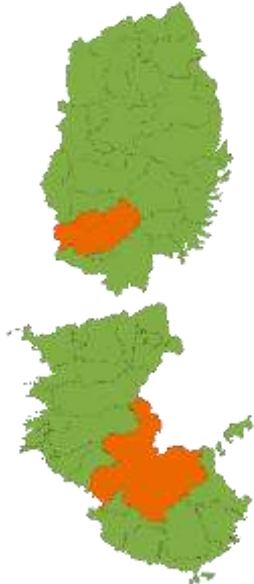
3. 活動を通じて

岩国班は、まず「地方が輝ける日本をつくる」というビジョンを掲げ、その達成のために岩国をブランディングしようと考えました。新居浜市は、産業都市として栄えた市です。しかしながら、高齢化や定住人口の減少により街の活気がなくなりつつあります。そこで観光という新しい産業によって街を活性化させたいというのが新居浜市が瀬戸内カレッジに望むことでした。

岩国市、新居浜市ともに短い時間でしたが、現地実習を実現し、そのうえで地域の持つ課題を実際に理解し、それに対しての課題解決案を毎日考えることは大変勉強になりました。また、受賞できたこともうれしいです。

岩手県胆江地方および和歌山県

農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証



【地域の基礎データ】

人口：	130,211 人（胆江地方／令和 2 年 12 月末現在）
	71,947 人（田辺市／令和 2 年 12 月末現在）
高齢化率：	31.9%（胆江地方／平成 27 年 1 月 1 日現在）
	32.7%（田辺市／令和 2 年 1 月 1 日現在）
産 業：	農業（稲作、畜産） など（胆江地方）
	農業、漁業、林業 など（田辺市）

【活動の基本情報】

参加学生数：	31 名（1 回生：7 名、2 回生：15 名、3 回生：5 名、4 回生：4 名）
活動期間：	平成 26 年 6 月～
担当教員：	藤田武弘

1. 活動実施の経緯

「農村ワーキングホリデー」は、農業や農村に関心をもつ都市住民が、繁忙期の農作業を無償で手伝う代わりに農家から寝食の提供を受けるというもので、参加者と農家との深い交流を特徴とする“日本型グリーン・ツーリズム”のなかでも、最も「鏡効果（他者との交流を通じてみた日常生活に潜む価値への気づき等）」の高い取り組みである。学生を参加者とする域学連携型の農村ワーキングホリデーは、次世代の若者たちが、農業・農村が直面する地域課題を当事者意識をもって理解する機会を提供するとともに、多世代間の交流による「鏡効果」により地域のコミュニティが活性化するなどの変化が期待されている。

2. 活動の内容

今年度、岩手プログラムについては現地での活動実施やセミナー開催等の通常行事は見送ったが、①オンラインを活用した事前学習会（8/20-21：受入農家による稲作、野菜作、6 次産業化、農協に関するオンライン講義を受講して意見交換）、②過年度卒業生を含むオンライン同窓会等（12/17）の行事を準備して実施した。

また、和歌山プログラム（田辺市）については、現地でのみかんの収穫作業時期に合わせて、宿泊施設から各農園に通い作業に赴く形での「泊業分離型」のワーキングホリデーを学部の LIP 活動ガイドラインに準拠した形で実施した（2 泊 3 日）。

3. 活動を通じて

今年度は、コロナ禍のもとでの実施により通常の対面による活動ができなかった（または、「泊業分離」のため農家との交流が極めて限定された）ことから、通常期待される交流による「鏡効果」の検証作業を行うことは難しかったものの、オンラインを通じたやり取り（レコーディングデータによる情報の共有化）を通じて、次年度の参加意欲を喚起するに相応しい取組にはなったかと考えられる。オンラインでの活動は、事前・事後学習の機会としては有効であり、対面活動復活後のハイブリッド型の取り組みにも活かせる成果を得たと考えている。

4. 成果物（ポスター）



農村ワーキングホリデーLIP

活動目的

農家の方が学生との交流を通して、田舎の日常生活に慣れた多種な価値に気づき、農村に対する「誇り」が再生していく過程や、移住はしないものの定期的に現地の人と関わり続ける「関係人口」づくりの効果について、岩手県や和歌山県の地域や行政と連携しながら考えます。

活動内容（WHとは）

都市部の希望者が農家に宿泊しつつ、農作業や農家の生活を体験するというものです。この取組を行うことで農家の労働不足の軽減、都市住民の農業への理解促進や、地域定住のきっかけ作りという効果があると考えられています。今年度は、和歌山県上秋津町のみかん農家でWHを行いました。このご時世、農家さん宅に宿泊することは出来なかったものの、自然に触れながら、普段の生活とは全く異なる体験をすることで自分のこれからの生活を見直すことのきっかけになるような活動ができます。

岩手県奥州農村 WH オンライン学習会

今年度は新型コロナウイルスの影響で、例年のように岩手に赴くことが出来なかったため、オンライン(zoom)での学習会を行いました。阿部短葉さんから「米づくりの1年(農事暦)と稲作農業の課題」、橋本結さんから「野菜づくりの1年(農事暦)と農業経営、新規就農の思い」、及川久仁江さんから「農業の6次産業化と農家女性」、岸上光亮さんから「農業協同組合の役割と課題(直売所動向を含む)」について、それぞれお話を聞かせていただきました。WHで現地を訪れるのとはまた異なった角度から農業・農村についての理解を深める良い機会となりました。(2年 履修)

◆

11月

上秋津 WH オンライン事前学習会

今年度は上秋津ワーキングホリデーに向けて、実際に農家の方をお呼びし、事前学習会を行いました。事前学習会では、みかんの栽培歴やかみ秋津全体の農業の話など普段は聞くことのできない貴重なお話をたくさんしていただきました。また、現地での活動のイメージができ、不安も和らぎました。農業についての理解を深める良い機会となりました。(1年 中清)

◆

12月

上秋津 WH とは…?

3日間、和歌山県上秋津町のみかん農家でWHを行いました。広大な畑で様々な種類のみかんが作られており、主にみかんの収穫を行いました。それがどれだけ大変な作業であるか実感し、これを毎日行っている農家の方々はすごいと感心させられました。物には選別や出荷なども体験させていただき、みかんがお店に並ぶまでの一連の流れを知ることができました。農家の方のお話から、後継者・人手不足などの課題も改めて実感し、非常に学ぶことの多い機会となり、WHについてより興味を持つ機会となりました。そして、本来であれば農家の方のお宅に宿泊させていただくのですが、今回はコロナ禍のため、グリーンツーリズム施設『秋津野ガルテン』で食事・宿泊を行いました。農家の方と食事を共にすることはできませんでしたが、温かい方ばかりで気さくに話して下さって純粋に楽しむことができましたし、このようなご縁で関係を築くことができ非常に良かったと思いました。(2年 中塚)

◆

12月

奥州農村 WH オンライン同窓会

オンラインではあるが、岩手の農家さんたちと顔を合わせて話すことができ嬉しかったです。なかなかオンラインに慣れるまで難しかったが、農家さんや普段なかなかできないOBOGの先輩方との交流もでき、新しい形だと感じました。農家さん同士の交流の場にもなっており、また先輩方を見て、長くつながれるということがとても素敵だなと感じ、私たちも大切にしたいと感じました。さらにこの同窓会を通して、コロナが早く落ち着いて実際に岩手に行きたい、直接お会いしたいという気持ちがより強まりました。(4年 岡崎)

今年度の課題

- ・ 学年の違う学生同士の交流が少ない
- ・ 事前事後学習の時間が十分に取れなかった
- ・ オンラインでの活動が多かったこともあり、学生の個性によって学ぶ内容が大きく変わった
- ・ 農家さんと夕食をともにすることができず、受入農家との交流が少なかった
- ・ 新型コロナウイルスの影響でフィールドワークが一回しか実施できなかった。次年度は、岩手県でのWHも実現させたい。



今後の展開

- ・ オンラインによる事前学習の取組は今後も続けていく
- ・ 事後学習などを通じて学生同士の交流機会を増やす

地域インターンシッププログラム（LIP）の沿革

■2008～10年度（平成20～22年度）

地域インターンシッププログラム（通称 LIP ※2012 年度に改称）は、2008 年観光学部の設置とともにスタート。観光学部より和歌山県下の自治体への協力要請を行い、各教員が担当する自治体との協議を重ね、早いプログラムでは 2008 年度中に、遅いものでも 2009 年度中にはプログラムの実施に至った。

- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：
6 件／42 名（2008）、8 件／46 名（2009）、3 件／18 名（2010）

■2011 年度（平成 23 年度）

- ・地域連携担当の配置
- ・地域インターンシップ実施要項の整備
 - ◇地域（自治体）からプログラム内容について提案を受け付ける「地域提案型」と教員の地域との共同研究をベースとした「申請型」の 2 つのプログラムを設定。
 - ◇主要な活動対象エリアを、和歌山県内に加えて大阪南部の自治体（岬町、阪南市、泉南市、田尻町、泉佐野市、熊取町、貝塚市、岸和田市）にまで拡大。
- ・地域提案募集：5 月に送付
- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：4 件／24 名

■2012 年度（平成 24 年度）

- ・名称変更：RIP から LIP へ改称
- ・実施要項の改訂
 - ◇申請型については、主たる活動エリアを和歌山県内と大阪南部以外でも可とした。
- ・地域提案募集：5 月に送付
- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：11 件／80 名

■2013 年度（平成 25 年度）

- ・地域連携の所管が観光教育研究センター（現：観光実践教育サポートオフィス）となり、担当者を配置。
- ・LIP の制度改善を図るため、活動実績のある自治体の担当者にヒアリング調査を実施。
- ・LIP の認知度や参加意識を明らかにするため、学生対象のアンケート調査を実施。
- ・地域提案型プログラムの質向上のため、活動実績のある自治体や和歌山市周辺の自治体を廻り、LIP の評価の聞き取りや新制度についての周知活動を実施。
- ・地域提案募集：4 月に送付
- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：5 件／73 名

■2014 年度（平成 26 年度）

- ・LIP 周知活動の一環として、2014 年度活動の報告書を作成（以後継続して作成）。
- ・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・実施状況／参加学生数（延べ人数）：10 件／139 名

■2015 年度（平成 27 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2015 年度活動の報告書を作成。なお、報告書には、2008～2015 年度までの LIP に関するデータを所収（以後継続して所収）。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：15 件／191 名

■2016 年度（平成 28 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2016 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施（以後継続して実施）。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：21 件／227 名

■2017 年度（平成 29 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2017 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：19 件／217 名

■2018 年度（平成 30 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2018 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：13 件／190 名

■2019 年度（令和元年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2019 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・ LIP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LIP 合同活動報告会」を実施。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：14 件／194 名

■2020 年度（令和 2 年度）

- ・ LIP 周知活動の一環として、2020 年度活動の報告書を作成。
- ・ LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
- ・ 地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
- ・ 実施状況／参加学生数（延べ人数）：16 件／209 名

【これまでの LIP 活動地域と活動テーマ一覧】

市町村名	活動年度	活動テーマ
和歌山市	2009	四季の郷公園周辺調査等
	2010	四季の郷公園と周辺農地を利用した農業観光の振興、および中心市街地との連携による活性化調査
	2011	お城を中心としたまちなか回遊性の創出
	2014	和歌山市民の森づくり事業
	2015・16	和歌山公園動物園（通称：お城の動物園）の環境エンリッチメントを通じた観光活用
	2016	地域資源を活用した、見どころマップの作成とまちあるきの実施(山東地域)
		名勝「和歌の浦」の魅力発信 和歌山市立伏虎中学校の閉校記念誌づくり
2016・17	観光資源を活用した観光振興の体験と調査・研究（和歌山城におけるおもてなし忍者による観光振興を通じて）	
2017	和歌山公園動物園（通称：お城の動物園）の地域資源としての観光活用～和歌山公園動物園の今後とリニューアルの検討～	

市町村名	活動年度	活動テーマ
岩出市	2015	観光地の活性化と情報発信
	2018	SNS を利用した地域資源再発見と訪れてみたくなるコンテンツ作り
	2019	ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成
	2020	道の駅「ねごろ歴史の丘」利用者調査及び利用促進企画

市町村名	活動年度	活動テーマ
紀の川市	2009	青洲の里施設内で実習および農家民泊体験、地域住民との意見交換
	2010	「細野溪流キャンプ場」集客向上と地域活性化の検討
	2011	細野溪流キャンプ場を起点とした地域活性化
	2012-16	紀の川市地域活性化
	2018-20	紀の川スイーツの開発

市町村名	活動年度	活動テーマ
かつらぎ町	2008	花園ふるさとセンターの有効活用に関する調査研究
	2012	かつらぎ町日帰りプランの作成
		都市近郊中山間地域における交流型農業への展開可能性を探る

市町村名	活動年度	活動テーマ
橋本市	2009	青年の家やどりの運営体験およびリニューアルプランの検討

市町村名	活動年度	活動テーマ
海南市	2020	交流・関係人口増を目指したエリア体験型観光コンテンツ開発

市町村名	活動年度	活動テーマ
紀美野町	2014	地域活性化にむけた調査研究（現地ヒアリング）
	2015-17	地区×学生による継続可能な地域活性化にむけた寄り添い型支援体制の構築と観光・交流情報発信
		世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営（認知症カフェでの実践を通じて）
	2018	地区×学生による知られざる歴史掘り起こしと観光・文化・交流情報発信
	2018・19	世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営（コミュニティカフェ等での実践を通じて）
	2019-20	地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生
2020	きみのげんきマップの作成	

市町村名	活動年度	活動テーマ
有田市	2013	みかん産地の農家の今後を考える（有田地域みかん農家経営継続課題調査）
		有田地域における魅力的な居住環境を考える（有田地域の居住地選定要因に関する調査）
	2014	地元小学生が見つけた地域の資源に対する傾向・特性調査とその活用提案
	2016	魅力ある図書館づくり—新図書館開館にむけて—
		空き家活用による地域活性化プロジェクト
	2017	市民が集う市民会館づくり—新市民会館開館にむけて—
	2017-18	地域で働く人の魅力を子どもたちに伝える
	2019	箕島の魅力発信
	2020	箕島で暮らす多世代の住民による魅力再発見
青みかん（摘果みかん）の価値を上げる		

市町村名	活動年度	活動テーマ
有田川町	2008・09	観光スポット調査（鉄道フロムナード、あらぎ島・清水温泉周辺）、および各種施設における就業体験
	2010	観光スポット調査（観光ブドウ園ほか）、および各種施設における就業体験と町内宿泊施設におけるモニター宿泊
	2011	観光スポット調査、および各種施設（鶏卵牧場ほか）における就業体験と町内宿泊施設におけるモニター宿泊
	2012・13	学生との協働による棚田保全活動体制の構築に関する基礎調査
	2014	しみず体験・学習プログラムの開発
	2014-18	学生との協働による継続的な棚田保全活動体制の構築
	2019-20	学生との協働による継続的な棚田保全活動（棚田ふぁむ）

市町村名	活動年度	活動テーマ
湯浅町	2009	町内主要施設の視察と集客イベントへの活用法の検討、および有力事業者への観光誘客に関わる聞き取り、イベントにおける JAZZ バンド演奏会の開催

市町村名	活動年度	活動テーマ
広川町	2014-19	津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える
	2020	ソーギー谷のお花畑の活用を通じた津木地域の活性化を考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
由良町	2014	観光地の新たな魅力発見

市町村名	活動年度	活動テーマ
日高町	2016・17	地域資源の自慢を後世に引き継ぐと共に経済効果のある参加型イベントの企画立案を共に考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
日高川町	2008	小学生の農村生活体験実習受入のための基礎調査
	2009	子ども農山漁村交流プロジェクト推進のための学生サポーターおよび課題発見
	2012	日高川町における祭事を中心とした伝統文化と地域活性化についての調査
	2017-19	体験教育旅行&夏学習～都会と大自然の出会い(かつらぎ町も含む)

市町村名	活動年度	活動テーマ
美浜町	2017	日の岬・アメリカ村の歴史的資源等を活用した観光とふるさと教育
	2019	カナダミュージアムにおけるミュージアム機能の強化
	2020	アメリカ村の観光コンテンツの発掘及び情報発信

市町村名	活動年度	活動テーマ
みなべ町	2012	みなべ町の新たな魅力発掘・発信事業(みなべ観光協会事業)

市町村名	活動年度	活動テーマ
田辺市	2008	秋津野ガーデン附設レストラン「みかん畑」利用客の観光行動アンケート調査、及び田辺市広域市町村圏の関係者との意見交換
	2009	農山村における UJI ターン者と地元住民との連携
	2012	和歌山県版・農山村ワーキングホリデーのシステム構築
	2017	ほっとスポット温川プロジェクト

市町村名	活動年度	活動テーマ
上富田町	2008	観光資源調査と地域の農・商・工関係者との意見交換会
	2017	地域資源を活用した“おどろきと感動”の地域づくり
	2018・19	笑顔が広がる美しい里づくり

市町村名	活動年度	活動テーマ
すさみ町	2008	各種体験観光施設の調査と関係者への聞き取り

市町村名	活動年度	活動テーマ
串本町	2017	マグロ料理で観光PR

市町村名	活動年度	活動テーマ
那智勝浦町	2016-18	地域の文化や風習、そこで暮らす人々と直にふれあいながら、これからの地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える
	2019	地域の文化や風習の体験、獣害対策、農作業、冊子作りを通じて地域の方々と触れ合い、地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える
	2020	地域の文化や風習の体験を通じて、地域住民と触れ合い、地域・自分・社会のより良いあり方・つながり方を考える。(興味関心に応じて)地域をフィールドにそれぞれの知見を深め、価値を創出していく。

市町村名	活動年度	活動テーマ
新宮市	2020	新宮市高田区における観光モデルコースの造成

市町村名	活動年度	活動テーマ
太地町	2009	移民関連勉強会、および地域住民、町職員との意見交換
	2012	地域資源として移民輩出の歴史を活かした観光の活性化を考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
岬町	2012	「道の駅」建設に伴う検討委員会
	2015	マップを手にウォーキングをしたくなる気持ちを沸き立たせる「まち歩きマップ」の作成
	2016	岬フィールドミュージアム構想
	2017	着地型観光による地域活性化の取り組み
阪南市	2016	産業観光ワークショップ HANNAN OSAKA cotton project
	2018・19	地方創生にかかる地場産物商品に関する調査・研究、デザイン考案等
	2020	古代米を活用した商品開発、PR に関して。「古代米をおいしく食べる」
田尻町	2015	君が見つけたじりの魅力ー出会いと交流で創る健幸のまちー
熊取町	2015	第4回熊取ふれあい農業祭
	2016	第5回熊取ふれあい農業祭
	2017	第6回熊取ふれあい農業祭

市町村名	活動年度	活動テーマ
岩手県奥州市 および和歌山県	2012	故郷（ふるさと）への誇りを取り戻すためのグリーン・ツーリズム
	2013	農村ワーキングホリデーを通じた農村再生の可能性を探る
	2014-20	農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証
北海道幕別町	2014・15	地域の観光に係る調査研究（観光と地域のあり方についての調査研究及び観光資源の掘り起こし等）
富山県南砺市	2015	五箇山における持続可能な観光の実現に向けた実証調査
長野県飯田市	2015・16	道の駅遠山郷を核とした地域活性化
宮崎県	2016	みやざき観光コンベンション協会からの依頼に基づいた同県「波旅宮崎」キャンペーンのより効果的な展開に対する提案、提言作成
山口県岩国市および愛媛県新居浜市	2020	瀬戸内カレッジ 2020

地域・団体名	活動年度	活動テーマ
JA いずみの管内	2011・12	JA 直営型農産物直売所を拠点とした都市農村交流の推進
わかやま産業振興財団	2015・16	特産果樹がもたらす共創価値の創造（新たな健康・産業づくり）
公益社団法人日本マスターズ陸上競技連合	2017	公益社団法人日本マスターズ陸上競技連合が主催する国際・第38回全日本マスターズ陸上競技選手権大会においてスポーツを通じて、地域の人びとや海外競技者との国際交流
和歌山県全域	2018	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」、大会参加者に対する観光ツアーの開発
	2019	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」における、観光ツアー同行を通じた観光業務の実践
	2020	「紀の国わかやま文化祭2021」学生による文化の魅力発信

2020 地域インターンシッププログラム活動報告書
令和3年3月31日発行
発行 和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィス
〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷 930
印刷 井手印刷株式会社

